

## 文 学 I

渡 浩 一

「御専攻は何ですか」という質問は、大学教員ならば誰しも屢受ける質問であろう。そして、この質問に答えることは、多くの教員にとっては、それ程困難さを覚えるものではなかろう。「〇〇学」ですと答えればよいのであるから。しかし、私の場合はこの質問に接するたびにやや答に窮し、すぐに答えられた試しがない。しかも、若干の躊躇のあとにでてくる答は必ずしもいつも同じではない。相手や情況により、時に国文学であったり、時に説話文学であったり、時に仏教民俗学であったり、時に民俗宗教学であったり、時に日本文化史であったりという具合なのである。これらは勿論口から出任せの出鱈目ではないが、かといってどれも不正確であることは否めない。

所謂学際的領域の事柄を研究テーマにした故にこのようなことになってしまったわけだが、しかし、それは結果的にそうなっただけのことであり、固よりそうなることを目指してきたわけでは更々ない。私の指導教授の一人の口癖は「研究方法は対象に則して立てるものであり、最初に固有の方法があるわけではない。」であったが、正にその言の通りで、私の場合、自分のテーマに則して方法を模索しつつ研究を続けてきたら、知らず知らずのうちに様々な学問領域の成果を学んでいたにすぎない。

私の最も中心となる研究テーマは「地藏信仰史」である。私は元々日本文化史に興味を持っていたが、中でも庶民の精神文化に関心を抱くようになり、高校時代、クラブ活動で「石仏」の調査研究に取り組んだのが直接のきっかけで、地藏信仰に強い関心を抱くようになった。そして、大学の卒論で『今昔物語集』の地藏説話を題材に古代末期の地藏信仰について論じて以来、地藏信仰史は私のライフ・ワークの研究テーマとなったのである。以来、私は説話や縁起を主な素材として地藏信仰史の研究を遅々たる歩みながら続けている。

説話や縁起を主な素材に地藏信仰史の解明に努める以上、必然的に私は国文学（特に説話文学・仏教文学）・仏教史・民俗学・美術史といった諸領域の研究成果に学ばざるを得なかった。何故なら、地藏信仰史という研究対象は非常に多面的で、様々な方法でアプローチしないと、その本質に近づくこと、その全容を解明することが不可能だからである。また、地藏信仰は日本人にとって最も親しみ深い信仰対象でありながら、その研究は他の阿弥陀・観音・不動・八幡・天神といった著名な神仏に比べ決して進んでいるとはいえないのであり、当然正統的といえるような研究方法も確立されていないからである。私は一貫して一つのテーマを追いつけるうちに、幾つかの学問領域にいつのまにか足を踏み入れていたにすぎない。学部・修士課程・博士課程を、日本文化コース・史学科・国文学科と三つの大学を渡り歩いたのも、研究テーマを変えた結果ではなく、逆に一つのテーマを追いつけた結果である。

一つのテーマを追いつけているとはいっても、地藏信仰史を一つの核にして興味や関心が少しずつ広がり、研究対象も徐々に広がりつつあるのは、やはり当然の成り行きである。元来の興味もあり、最近では「絵解き」・「御伽草子」・「近世仏教」・「外国人の見た日本」といったテーマにも興味を持っている。元々菲才で不器用なうえ、時間的余裕もそれ程多くはないので研究は遅々として進まないが、今は、地藏信仰にだけこだわることなく、少しずつ研究の幅を広げて行きたいと思っている。そして、やがてまたその成果をライフ・ワークである地藏信仰史の研究に収斂させて行くことができればと思っている。

来年度から、私は新たに人文特講の授業を受持つ予定であり、また、文学Ⅰに関しては時代・分野に関する制限が撤廃される予定である。今まで私は、本学に於いては自分が専門的に勉強して来たことを授業で扱うことがなかったが、来年度からは積極的に、人文特講や文学Ⅰや教養ゼミを中心に、自分の専門領域や興味を持っているテーマを取り扱いたいと思う。取り敢えず来年度は、人文特講では「地獄の世界」をテーマに、スライドやビデオも使用しながら地藏信仰や絵解きの世界なども扱い、文学Ⅰでは「御伽草子の世界」をテーマに、代表的作品ばかりでなく自分の興味のある幾つかの作品を講読してみようと計画している。ま

た教養ゼミでは引き続き「モースの見た日本」をテーマに『日本その日その日』を輪読する予定でいる。学んで来たことを講ずるという面よりも、興味のあることを講じながら学んで行くという面の方が強い講義が多くなりそうだが、それだけに、いい意味での緊張感のある授業ができるかもしれないと密かに考えている。